シェイクスピアと教育

中　村　六　男*

Mutsuo NAKAMURA : Shakespeare and Education

(1955年12月10日受理)

文学作品が作者の実際生活の経験と作者の想像，心像，連想，意図，思想等の心理的作用と作者の住む言語を含む文学的伝統との三要素が融合混和したものより創作されて来るものとするならば，作品形成の一つの要素たる作者の実際生活の経験をば可能ならしめる作者の生きた社会環境を眺め，それより作品を理解しようとする試みもやはり有意義な一面を持つものと言うことが出来よう。こうした観点からシェイクスピア時代の教育状態を観察し，それが如何様に彼の作品に響いているかを眺めてみよう。

(1) 家庭及び郷土教育

シェクスピアは1564年4月23日に Warwickshire の Stratford-on-Avon という英国中部の当時人口僅か1,500程の田舎町に生れたと言われる。1564年は日本では足利末期の戦国時代に当る。彼の生涯は余りあきらかではないが，日本の戦国時代の者の生涯が明瞭でない事を考えると，寧ろ彼の伝記は幾多の学者の研究によつて明瞭の方であると言い得るかも知れない。いゝ伝えられる所によると彼の父方の祖先は Norman 系の辺境の衛士の出であり，母方の Ardens 家は当時農民であつたが英国で最古の家系の一つに属する旧家であつて，彼の母より16代前の祖先はサクソン人の州長官であつた。又 Stratford-on-Avon は古くローマの英国占領時代から交通の要地であり，Warwickshire は長い間ケルト人と Anglo-Saxon 人との接触していた地方でもあつた。其故に彼が幼少時代に母の膝元で今は庶民なるも昔の父母の祖先達の武勲が町や其周辺に数多く残存していた古城，古刹，森，川，牧場，住民，其地方出身の偉人達，伝説，風習などに関連づけられて語られた時に若い想像心を働かせ眼を輝かせて傾聴したであろうことは容易に推量され得る所である。この様にして彼の幼な心に植えつけられた郷土の自然と人間とに対する愛情，想像心，観察眼が芽を出して，やがて芸術にまで成長し，「真夏の夜の夢」とか「御意のまま」という様な郷土的要素の色濃い牧歌的作品として花を咲かせ，傑作に結実したものと考えられる。勿論牧歌的風潮はイタリーよりスペイン，フランスを通つて当時の英国に流入し，大流行し，そうした傾向の作品が盛に書かれていたのであるが，幼少時代から培われた郷土愛がなかつたならば，彼が如何に天才であつたとしても，単に流行を追うのみではあの様な作品を書くことが出来なかつたであろう。更に当時の英国は未だ政治経済其他の社会の種々なる方面において現代の様に地域的社会的分業が甚しくはなかつた。彼の生れた町は他の町々と同様に英国否世界の縮図そのものであつた。その小社会に住する人々を深く観察することはとりもなおさず人間一般社会を観察する眼を養うことに外ならなかつた。こうした観察眼が養われていなかつたならば後年彼がロンドンに出で幾多の人間を見たとしても決して人間及び社会の深奥にある真の生きた姿を示す四大悲劇を始めとして多くの傑作を創作することは不可能であつたであろう。しかし幼少時代に受けた家庭教育や郷土より受けた教育にのみ彼の作家としての成功の理由を単的に求めることは危険である。唯々その理由の一つであると考えるべきであろう。

次にシェイクスピアは子供をどんな風に考えていたであろうか。当時の人々の子供観には大別して三種の見方があつた。

第一の考え方は子供は大人の小文字であり，イヴに誘惑されて林檎を味う以前のアダム其儘の純真な姿であり，幸福であり，行動は天真爛漫にその性格を現わし，いわば新に描かれたばかりの自然の新鮮な画である。それが大人になると穢く汚れるのであると説く John EARLE の様な見方である。

第二の考え方は子供は人間の形をした獣であつて，元々子供とは情慾の炎と隠れたる恥らいと原罪との間に懐妊されたものであり，汚い血に混れて穢れた裸体でこの世に投げ出されたものである。其証拠には母親は其子に出産時の模様を話すことを恥じ嫌うではないか。子供とは野生の野獣であり，行動は乱暴粗野であつて教訓を与えても受け容れようとしない。全く類人猿其儘である。されば子供を教育するには子供が少しく物が解る様になり，体力がつく様になつたならば直ちに鞭を常に加えて両親や教師を絶えず恐れさせ，子供の意のまゝに行動す

* 信州大学繊維学部　英語研究室

ることを禁じ，大人の厳格な訓練下に生活する様にせねばならぬと説く見方である。これはキリスト教で当時の庶民の間に勢力を張りつゝあつた清教徒の考え方であつて Lewes Bayly の説く所である。

第三の考え方は獣類は皆生殖に依つて自己の永続化を計る。この点人間と雖も同様であるが，人間は其外に思い出や功績や立派な事業があつて，此等も永続させねばならない。それには子供に頼る外はない。其故に子供とは自己と同時に此等のものを永続させるためのものである。されば家名を興し重んずる人は非常に子供を大事にすると説く見方である。これは Francis Bacon の考え方である。

以上三つの見方のうちでシェイクスピアの子供観は大体第三の見方に近かつた様である。At first the infant, / Mewling and puking in the nurse's arms. (AYL. II. viii. 134～135) と人間が一生のうちで演ずる七つの時代の第一幕として赤ん坊時代を Jaques の言葉に依つて挙げているが，この幼児は，By the law of nature thou art bound to breed, / That thine may live when thou thyself art dead; / And so, in spite of death, thou dost survive, / In that thy likeness is left alive. (Ven. 171～174) と死後の自己の永遠化であり，From fairest creatures we desire increase, / That thereby beauty's rose might never die, / But as the riper should by time decease, / His tender heir might bear his memory : (Sonn. I) と自己の永久に生きる手段であると同時に自己の美しさと思い出を伝えるものである。この様な幼児観からするならば，I have given suck, and know / How tender 'ts to love the babe that milks me: / I would, while it was smiling in my face, / Have pluck'd my nipple from his boneless gums, / And dash'd the brains out, (Mac. 1. vii. 54～58) という言葉は Macbeth 夫人が単に我が子への愛情を犠牲にしても野心を満足させようという言葉の意味だけでなく，自己の永遠化をも野心のために捧げ，自己の永遠の破滅をも暗示しており，如何に其言葉の恐ろしい悪魔の囁であるかが知られるのである。又 Macbeth 第三幕第二場の Macduff 夫人と其息子とが Macbeth の放つた兇漢の手に斃される場面が如何に pathetic であるかが了解出来るのである。

以上の様なシェイクスピアの子供観は第二の説に述べた見方では決して出来るものではなく，またこうした場面の描写も不可能となるであろう。彼がこの様な考えを懐くに至つたのは彼の少年時代に受けた家庭教育にその原因の一つを見出すことが出来ないであろうか。これが郷土愛と相俟つて後年彼をして父親に紳士階級としての紋章の佩用の許可のために努力せしめ，又晩年故郷の町に立派な邸宅を購入せしめ，New Place と名付けて其処で一生を終らせるに至らしめた原因でもあつたのではないだろうか。

（2）初等及び中等学校教育

ルネサンスの風潮がおくればせながら英国に入つて来，エリザベス朝に文化の花を満開させたのであるが，ルネサンスは英国にも宗教改革を齎らし，所謂 Dissoluton という結果を招来した。そこで僧院は廃止となり，土地は王室に没収されたり，都市や有力な個人の所有に帰した。僧院や寺院の由緒深い建物すら個人の邸宅建設の石切場の代用となる有様であつた。其結果従来僧院や寺院で行われていた教育は大打撃を蒙たのである。Henry VIII (1509～1547) 及び Edward VI (1547～1553) の治下に礼拝堂は取り壊され，教団は廃止された。其為に其等に附属していた学校の多数は自然廃校の運命になつた。しかしこれは両王の政府の意図した所ではなく寧ろ正反対の結果であつた。彼等は学校を盛にしようとしていたのであつた。しかし学校を維持する財力が政府になく，又都市にもなかつた。其処で Edward VI の時に「学校存続の為の委員」が任命され，一定数の学校の存続が計られた。Shrewsbury とか Tonbridge とかいう様な有名校の外にも種々な学校がこの時に設置されたり再建された。エリザベス女王の時になると学校設立の事業が国力の充実と国民の意気昂揚と相俟つて極めて盛に推進され，かつて無き多数の grammar schools(文法学校) が国中至る処に以前よりも堅実な効果的な基礎の上に開設された。何の町と雖も文法学校を持たないものはない程になつた。宗教改革は Dissolution を惹起し学校を一時衰微せしめたが結局それが原因となつて学校を教会の掌中から解放せしめて俗界の教育機関として，教派の如何を問わず，階級の上下を問わず，至る処に設立せしめんとする気風を振興せしめて一般に教育を普及せしめる結果を招来したのであつた。そして1600年までには全国に約 360 の文法学校が在存するに至つた。これは当時の人口13,000に対して文法学校一校という数であつて，英国史上前後を通じて人口対文法学校の最大比率を持つものであると言われている。この1600年は日本では秀吉が死去し，関ガ原の合戦のあつた年に当り，当時の英国の学校教育が質は兎も角も数において如何に進んでいたかを示すものである。

かく多数有つた文法学校には Dissolution に依つて礼拝堂が危く破壊からまぬがれて学校に変身した中世から存続して来たものがあり，寺院が変つて町人の寄附を財源として学校に転向したものがあり，都市や町の同業者組合が設立したものがあり，貴族以下あらゆる階級の篤志家や有力者が創設したものなど種々なるものつがあた。一例を挙げると Newport 町の Rye 家の未亡人に Mrs. FRANKLAND と言う人があつた。この婦人に一人息子があつたが，落馬のため死んだ。婦人はその悲しみを慰めるために自らの息子と同年配位の子供達を教育する Newport Grammar School を創設しようと多大な自己の私財を基金として提供し，更に Oxford や Cambridge 大学へ進学する子供のために奨学資金を設立した。その学校に「彼女と其息子とが之を設定した」と言う意味の記銘を掲げたと語り伝えられる成立歴史を持つた学校もあつた。以上の様な都市や町の文法学校は公記録に載つている歴史の明瞭なものであるが，其外こうした公記録に載ることなく歴史上不明な村落学校が全国に相当多数存在して居り，更に又幾多の私学校もあつたと推定されている。

さてこの文法学校とは中等教育を行う学校であつて，叙述の順序としては初等教育を行う学校について述ぶべきであつたが，現在までの所では当時の初等教育に関しては余り明瞭な研究がなされていないらしいので順序を逆にしたのである。初等教育を行う学校がエリザベス女王の治世の末期までに相当多数設立されていたろうと一般に推察されている。例えば1586年に Stratford の George WHATELY と言う人によつて Henry-in-Arden に初等学校が設立された記録が残つているという。当時の初等学校は Free School と呼ばれた。現在の授業料のいらない学校を意味する a free school とは少しく意味を異にした学校である。Free School ではＡＢＣと文法及び three Rs などが教えられ，文法学校へ進学する子供とそれだけで学校をやめる子供とに初等教育を与えた。又別に初等中等両教育を施す a grammar and a free school という初中兼設の学校があつた。LLL. V.i. 50 に述べられている horn-book は Free School で使用された教科書である。それで LLL. 中の Holofernes 先生は初等学校の先生か或は初等中等併立の a grammar and a free school の先生かいづれかであつたことになる。当時の初等教育は専ら Free School の教師か初中併立学校の教師によつてなされたのであるが，其外に田舎では教区の受持僧がこれに当ることが多く，又町でも役僧や鐘撞き人がそれに当ることが多かつたといわれている。Wiv. 中の a Welsh parson の Sir Hugh Evans は受持僧が初等教育を行つていた例である（Wiv. IV.i)。シェイクスピアの伝記のうち1584年から1592年までの間が不明であり，この不明の期間は彼が田舎教師をしていたのだという説がある。これは William BEESTON という彼と同僚だつた俳優がそのことを Aubrey に語つた所に根拠を持つ説であるが，果して彼が教師をしていたのであつたならば恐らく文法学校の助教師か Free School の教師（abecedarius）であつたのだろうと推察される。しかしこの説に対して彼は貴族の子供の家庭教師であつたと言う説もあり，又村落学校か私学校かの教師であつたのではないかとも考えられる。彼の 'hiatus' 中に教師であつたとする説は彼の作品に，LLL の Holofernes 先生や Wiv. の Sir Hugh Evans 先生や Err. (V.i. 238ff) の Pinch というインチキ先生などが現われ，其等の人物は教師の経験のないものには到底創造出来るものではないと考えられるからでもあろう。

当時の初等教育で注意すべきは町や田舎の初等学校でも初中併立学校でも男女の子供に同様に教育が与えられたことである。当時の大教育家 Mulcaster の様に女子教育を熱心に主張していた人が居つたことは知られていた所であるけれども，庶民の女の子供が男の子供と同様に初等教育を受けていた事実は漸く最近になつて歴史家に発見された所である。LLL. IV. 75～79 の牧師補の Nathaniel が Holofernes に誦う言葉に，Sir, I praise the Lord for you : and so／may parishioners; for their sons are well／ tutored by you, and their daughters profit very ／ greatly under you : you are a good member of／the commonwealth. とあるのもやはり Holofernes 先生の下で男女の子供が共学で教育を受けていたと解すべきであろう。又 Shr. III.i.16～20 の言葉に，Why, gentleman, you do me double wrong, ／To strive for that which resteth in my choice:／I am no breeching scholar in the schools; ／I'll not be tied to hours nor pointed times,／But learn my lessons as I please myself. とあるのは現代の興味中心を説く教育原理の萌芽とも先駆的考えであるとも見られる興味ある言葉であると同時に Bianca と言う娘も学校生活の経験があり breeching scholar 即ちいつも鞭で打たれがちな生徒を男女共学の学校で実際に熟知していたことを表わす言葉と解してこそ真実性を帯びて面白味が出て来ることになる。貴族の婦女子や女王自身も非常に学問教養があつたことは別として，一般人の婦女子が当時相当な教育

を受けていたことは当時の日本の一般女子教育の程度と比較したならば驚く外はない。

前述の如くエリザベス朝には昔から存続したものや，復活再興されたものや，新設されたものなど，非常に多数の中等教育を施す文法学校が有つたのであるが，其等の中にはEtonを始めとしてWestminster, Shrewsbury, St. Paul's, Merchant Taylor's という様な非常に高級な有名校があり，Udall, Ashton, Camden, Mulcasterの如き当代一流の大学者大教育家が教師におつた。一般の文法学校にもやはり相当な教師がおり，之等教師はすべてOxford, Cambridge 大学の出身者であつた。教師の下には助教師が居つて彼等を助けた。教師の任免権は彼等の出身の両大学に委託されていたので，教師の人事は両大学が行つた。このことが教育効果をあげる上に大いに貢献したと言われている。

子供が文法学校に入学するには入学してから授業を受けるに充分な程度にラテン語を英語と共に読み書きし得ることが必要条件の一つとされていた。年齢は学校によつて異つたが，大体7才以上に達していることが必要であつた。14～16才になるまで在学すると大学へ進学するに熟した生徒と見做された。エリザベス朝では文法学校を卒業しただけでも社会の相当な高い地位に就いても充分な程度の教育が与えられた。生徒は学年別に組別されず全生徒が同一場所で教育を受けた。日課は三回の休憩食事時間を含めて一日11時間であり，夏は午前6時，冬は7時にそれぞれ始業された。授業内容は文法学校という名の示す様にラテン語文法が中心をなしていた。要するにラテン語学習学校であつた。それは当時の社会に非常な勢で勃興して来た中流階層の需めに応ずるものであつた。当時はラテン語は国際語であり，学術語であり，商業語であり，教会用の言葉でもあつた。現在の日本における英語以上にあらゆる職業への鍵であつた。僧職に就くにも大学人となるにも必要なることは勿論，外交官法律家，自然科学者，哲学者，建築家，音楽家等あらゆる高級職業と見做されるものに従事する者はラテン語を読み書き話し，時にはラテン語で物を考えることすらも必要と考えられた。それのみか商人，地頭代理(bailiff)，町の書記，同業組合書記すらも会計簿や議事録をつけるためにラテン語が必要とされた。かくの如く当時の社会には唯ラテン語の文法を生半解に知るのみでなく，実際に役立つ生きた言葉として知ることが必要であつた。勿論少しく英語が話せることを以つて英語の生きた知識ありとする徒輩の程度のものではなかつた。其故に一般人にして為すあらんと志す者にはラテン語程大切な教育はなかつたのである。勿論 Mulcaster の様な卓見を持つた教育家が居つて，やがて英語がラテン語に代つて其以上に英国では重要な役割を果す日の到来することを見抜いて，英語の重要性を力説した人々もないわけではなかつたが，兎も角も当時は未だラテン語は全盛時代であつた。ギリシャ語は少数の有名校を除いては一般の文法学校で教えられることは稀であつた。しかしラテン文法書の始めにはギリシャ語の alphabet が印刷されていて生徒にギリシャ語の存在を知らしめ，極めて僅かは教えられたのだろうと考えられている。

当時の文法学校の教育は厳格其物であつた。"Spare the rod and spoil the child" の諺の教訓そのまゝを実行した。幾多の罰則があり，遅刻や怠惰は勿論教えられたことを忘れても直ちに生徒は教師から鞭を加えられ，常に教師を恐れていた。生徒は，And then the whining school-boy, with his satchel／and shining morning face, creeping like snail／Unwillingly to school. (AYL. II. vii. 145～147) の様な状態であり，又 to sigh, like a／schoolboy that had lost his ABC, (Gent, II. i. 20～21) とABCを忘れた生徒の如く溜息をつくことをひどい歎息の形容として用いているのを考えても如何に生徒が学校を嫌い恐れたかが知られる。しかし其反面屢々演劇が学校で行われ，教師と生徒とが合同して演ずることもあつた。

シェイクスピアはStratford-on-Avonの文法学校に学び，其処を中途退学したといわれている。この文法学校は1295年頃既にその前身校があつたことが知られている。1482年に其町の聖十字教団の布教師 Thomas Jollifeが敷地を学校に与えて Free Grammar School として整備したので，通常彼がその学校の創設者と考えられている。其後宗教改革の余波を受けてその教団は解散され学校は遂に廃止され，1547年に王室に没収されて了つた。1552年にEdward VIの時にStratfordの町民が嘗ての教団の建物と養育院と共に学校をも買戻して，1553年に"The King's New School of Stratford upon Avon," という名で新発足させた。この学校は財政的にも内容的にも可なり優秀な文法学校であつて，教師の俸給も20磅支払われ，Warwick 市の文法学校の教師の俸給12磅5志に比すると可なりの高給であつた。Westminster, Eton, Winchester, Shrewsbury の如き有名校の教師の俸給よりは低かつたけれども他の一般の文法学校の教師よりも高い俸給であり，Oxford, Cambridge 大学の fellows の俸給よりも高給であつたと言われている。其処に教鞭を

取つた教師も優秀な人達であつた。Richard Fox (1477～8) 教師は Oxford 大学の Corpus Christi Collge の創設者と言われ，其後も William Smart (1554～65) 教師は後 Fellow of Christ's College となつた人であり，John Brownsword (1565～7) 教師は有名なラテン語の詩人であつたと伝えられる。シェイクスピアが7才でこの学校に入学し，"Small Latin and less Greek" を其処で1571～1577年までの7年間に学んだとすれば，始めに教を受けた教師は Walter Roche, B. A. (1569～71) であり，この人は後 Oxford 大学の Corpus College の fellow になつた人である。次に教を受けた教師は Simon Hunt (1571～5) であり，この人は旧教徒であつて後 Douai の Jesuit となり Rome の英人懺悔僧となつた人である。次の教師は Thomas Jenkins, M. A. (1575～9) であり Warwick 市の出身で Oxford 大学の St. John's の fellow となつた人である。この様に彼が教を受けた教師達は大学出の而も相当な人物であつた。この地方の伝説によると，この町の南西方3哩程の処に Luddington という小村があるが，現在そこに Church of All Saints という寺がある。これは1872年に建立されたもので当時のものではないが，その当時あつた寺の住職に Hunt 先生が文法学校の教師をやめてからおさまつていた。シェイクスピアが Anne Hathaway に子供が出来て困り，大急ぎでこの寺で嘗ての先生であつた Hunt 住職の手で1582年に結婚させてもらつたと伝えられている。しかし当時の寺の記録が失われ真偽の程が不明である。 Rom. の Friar Laurence や Ado の Friar Francis などこのHunt 住職と何か関係がありそうな気のするのは考え過ぎであろうか。

Stratford の文法学校の実際に行われた Curriculum は現在不明ではあるが，大凡 St. Paul's や Ipswich や St. Bees の当時のものと大差がなかつたであろうと言われている。学課を受けるに足るラテン語と英語とを読み書きする知識が入学に必要とされたか，或は其以下の知識しかなくとも入学準備教育が文法学校所属の助教師によつて授けられたと考えられている。恐らく初中併設の文法学校であつたのだろう。教科書は (1) the Grammar of Colet or William Lily, (2) *Sententiae Pueriles* by Leonhard Culmann; *Pueriles Confabulatiunculae* by Evaldus Gallus, (3) Aesop's Fables in Latin Version ; the Moral Distichs of Cato, (4) Cicero, Sallust, Caesar, Ovid, Virgil, Horace or Terence, (5) the Bucolica of Baptista Spagnolo Mantuanus, the *Zodiacus Vitae* of Marcellus Polingenius の様な書物であつたと伝えられる。Wiv. IV. i. の Welsh Parson と William 少年との文法問答，1H4 II. i. 104～5; Ado IV. i. 22 ; Tw. N. II. iii, 3; LLL. IV. ii. 82; Shr. I. i. 167; LLL. V. i. 10, 84; Tit. IV. ii. 20～21; LLL. V. i. 33, 34, IV. ii. 3～7, V. i. 30～40 などはラテン文法書にあつた言葉をそのまゝ使用したものであり，その中に載つているラテンの名句を使用したり，そのラテン句の意味を利用したのであると言われる。又 All's W. II. i. 73ff は Aesop's Fables からの借用であり，LLL. IV. ii. 97～102 中には Mantuanus からの文が含まれて居り，Cor. V. iii. 141, (The end of war's uncertain= 'Belli incertus exitus')' Gent. III. ii. 15 (A little time, my lord, will kill that grief= 'Doloris medicus tempus')' Cym. III. V. 37～38 (the cure where of, my lord, ／'Tis time must do.) などは *Sententiae Pueriles* にあるラテン文を英語にして用いたものと言われている。其他 Ovid, Virgil, Plantus, Seneca などの影響も作品の方々に見られる。

Stratford の文法学校は7才で入学して16才で卒業することになつて居り，此処の卒業者はこの町の出身者で Sir Hugh Clopton という人が設定した奨学資金が6人分あつて，其によつて学資がなくても Oxford や Cambridge へ6人進学出来ることになつていた。しかし天才シェイクスピアは奨学金を受けて大学へ進学しなかつたのみかこの学校を卒業すらもせず，家庭の事情で14才の時に中退してしまつたと伝えられる。しかしそれは唯々家庭の事情ばかりによるのではなく，彼の作品中に見られる教師や生徒の描写から判断すると彼は余り学校が好きでなく家庭事情が困つて来たのをよき理由として退学したのではないかと考えられる。彼の作品に現われる教師は皆一種の馬鹿物であり， LLL. 中の Holofernes, Wiv. 中のSir Hugh Evans, Err. 中の Pinch の如く皆嘲笑の的になる様に描かれている。Tw. N. では家令の Malvolio の下卑なひどい恰好を，Most villanously; like a pedant that／keeps a school i' the church. 'Tw. N. III. ii. 80～81) と教師を image として説明している。又生徒も前にも述べた，AYL. II. vii. 145～7, Gent. II. i. 20～21, の如く，又 Rom. II. ii. 159～60, Shr. III. ii. 152, III. i. 18～20 の如く総て学校を嫌いその束縛から逃れることを喜ぶ姿として表現されている。彼の郷里の学校時代の印象が未だ心中に鮮やかに残つていたと思われる初期の作品程この様な教師と生徒との描写の辛辣性と頻度とが高く，それが薄れて行つたと思われる後期の作品程描写が温和となり頻度も低くなつている。それは彼の様に性来人間性と自由とを尊ぶ人間には当時の

厳格其物であつた学校教育に非常な反撥を感じ，生徒の天性と自由とを束縛する衒学的な教師を憎み，当時の学校教育特に中等教育の根本思想をなしていた，Finally, as God hath sanctified the rod and correction, to cure the evils of their conditions, to drive out that folly which is bound up in their hearts, to save their souls from hell, to give them wisdom; so it is to be used as God's instrument to these purpose, To spare them in these cases is to hate them. To love them is to correct them betime. Do it under God, and for Him to these ends and with these cautions, and you shall never hurt them; you have the Lord for your warrant. Correction, in such manner, for stubbornness, negligence and carelessness, is not to be accounted over great severity, much less cruelty. (John Brinsley : Ludus Literarius or the Grammar School, 1612)のような訓育には既に述べた彼の子供観からしても共鳴出来なかつたのかも知れない。或は少年時代案外な怠け者で学業不振であつたのかも知れない。彼が果して学校教師の経験があつたとすればその間にひどい目に逢わされたのか，学校教師の醜い半面を強く見せつけられたのかも知れない。如何に当時の教師には非道な輩が多かつたとしても其処には何かの原因があつたのであろう。

（3）大　　学

初等中等教育の場合と同様に当時の大学もルネサンスの影響を受け，宗教改革など種々社会的変革の波が大学に押寄せた。中世的旧教的支配下の状態から脱皮して近代的大学へと生れ変りつつあつた。国力の充実，国際的関係における優位，海外発展，数学天文学などを先駆として自然科学の勃興，古典文学の研究が盛になり humanism の隆盛，聖書の盛なる研究，一般国民の知的水準の高揚，其等によつて希望に満ちた自由な風潮を学んだ現世的非宗教的関心と要素とが次第に大学を色濃く染めてゆき，大学は多様性を帯びるようになつてきた。既に Henry VIII の時に Cambridge に Lady Margaret, Oxford に Fox 及び Wolsey というような Colleges が新設された。しかし其後 Edward VI 及び Mary の治下に神学上の論争，党派抗争が起り，其結果互に放逐し合い，破壊を行い，人々を盛に火刑に処し，芸術品や図書などを焼いた。大学は1530～1560年の間は宗教的混乱及び政治経済の難事の煽を食つて非常な損害を蒙つた。しかしエリザベスが即位するや大体 HenryVIII の志を継いだが政策施政は非常に温和であつたので党派抗争宗教論争は緩和され，Colleges は大いに拡充され教育制度が従来よりも効果的となり，宗教的よりも世俗的な面の比重が重くなり，多様性を一層高め，多方面的になつたので，大学は文学，政治，経済，法律，科学，宗教等多方面に貢献することになり，特に演劇などには university wits の大活躍を見るに至つたのである。当時の Oxford, Cambridge 両大学は「国家の両眼」と称せられるに至つた。

中世の Colleges は大学よりも高いものであつて，学生の教育のためのものではなく大学を卒業した者が殆んど終生と云つてよい程長い期間に亘つて学問の蘊奥を究める所であつたが，それが拡充されると共に非常な変革をとげた。文法学校を卒業した生徒が13才から16才の年齢で入学して学生となり，通常約7年間在学して其課程を修める所と変つた。この大変革と共に所謂 the tutorial system が発達して学生は大学の fellow で彼等の teacher and guardian の役をしてくれる tutor の個人的指導に委ねられることになつた。今代的大学組織がエリザベス朝より始まつたのである。

学寮（college）の学生の年齢が極めて若くなつたので学寮と文法学校とは学生生活が大差なくなつた。粗暴で訓育がやかましく，文字通りの鞭撻が盛に行われるようになつた。其反面馬鹿騒ぎや遠足が多くなり，音楽演劇が盛に行われるようになつた。このように大学の組織や生活が大変化を遂げたのであるが，教育内容はそれに伴うだけの変化をせず，相変らず中世的な所が多く，学課は語学，哲学，高等普通科学，民法奥義，自然科学及び神学等であつた。学習法は現代の討議（discussion）形成ではなく論争法（the method of disputation）が広く行われた。論争に秀でることが出世の緒となつた。其故に大学教育では文法学校のラテン文法のように論理学がその根幹をなし，あらゆる学問研究の基礎をなしていた。

Oxford 大学は比較的に保守的であり Hooker の如き偉大な神学者が出て英国国教会の中心伝統を作りあげたのであるが，其外にも当時の指導的な人物を多々輩出した。Sidney や Ralegh の如き実際家，Camden, Hakluyt, John Foxe, Harriot の如き学者，Donne, Samuel Daniel, Florio, Sir John Davies, Peele, Lyly, Lodge, Beaumont, Marston の如き詩人劇作家達，Dudley や Sir Henry Wotton の如き外交官，Anthony Shirley の如き冒険家，Mulcaster の如き大教育家，John Bull, Morley, Dowland の如き音楽家，Jewel の如き大神学者を輩出せしめた。

これに対して Cambridge 大学は当時比較的に進歩的

であり，Calvinism の勢力が強かつた。女王の師であつた William Grindel とか Ascham などは Cambridge の出身であつた。其外に Burghley 及びその子の Robert (the Cecils), Lord Keeper Bacon, Sir Thomas Smith, Walsingham, Oxford 伯, Essex 伯, Southampton 伯, Gresham, Cranmer, Bancroft 等の如き指導的政治家，貴族，学者達，又当時の清教徒の指導者であつた Cartwright, Travers, Dering, Fenner, Perkins, Greenham 等，Spenser, Marlowe, Nashe, Greene のような詩人劇作者達，Cavendish の如き探検家，John Dee, William Gilbert の如き科学者，Bacon や Coke のような哲学者法律家，等々を輩出せしめた。

エリザベス女王はこのように「国家の両眼」とも見るべき両大学を非常に尊重し，1564年に Cambridge を，1566年に Oxford を訪問し，其後もしばしば訪れて親しく学者達の論争に耳を傾け，自らも学者達に古典語で演説をしている。

シェイクスピアは大学出身者ではなかつたけれども大学才子の劇作者達と親しい間柄であり，前述の如く当時の大学は中等学校と同様演劇に非常に熟心であつた関係上大学とは全然無関係ではなかつた。Oxford 大学は彼の郷里の町からロンドンへ出る途中にあり，彼は屢々其処に立寄り，大学を親しく知つて居たであろうと云われている。Oxford 大学総長であり，The College of Pembroke と深い関係の有つた The third Earl of Pembroke であつた William Herbert とは特に親しかつたと伝えられている。Rom. 及び R. 3 の両芝居からの最初の公の引用が Cambridge 大学の St. John's の講堂でなされたといわれている所から考えても彼の作品は両大学でも相当に知られ問題にされていたものと思われる。Wiv, の仏人医者の Coctor Caius の言葉に，I cannot tell vat is dat : but it is tell-a/me dat you make grand preparation for a duke/de Jamany : by my trot, dere is no duke dat the/court is know to come. (Wiv. IV. v. 87～90) とあり，a duke de Jamany とあるのは1592年8月に Oxford 大学を訪れた Duke of Wirtemberg の Frederck を時事諷言として云つているのだと伝えられる。又大学で論理上用いられる用語や論争の際の用語 major, ergo, argal などが IH4 II. iv. 544, Err. IV. iii. 57, Mer. V. II. ii. 58, All'sW. I. iii. 53, Ham. V. i. 13, 22, 55 に用いられ，AYL. 中の道化 Touchstone の言葉，Then learn this of me : to have, is to/have ; for it is a figure in rhetoric that drink, /being poured out of a cup into a glass, by filling/the one empty the other ; for all your/writers do consent that ipse is he: now, you/are not ipse, for I am he, (AYL. V. i. 44～49) の中では大学での修辞学の比喩が冗談として扱われていると考えられている。2 H 4 III.ii.10f に Master Silence, J. P. の息子の William が Oxford 大学に在学し，そこから the Inns of Court に転じ，その両者で humanities と法律とを勉強し，Gloucestershire の地主とし治安判事として父親の後目を継ぐのに適するようになるだろうと云つている。其外大学課程と関係のある用語，Tim. IV. iii. 252f, 268ff に proceed, commence; 2H4 Ind. 1. 5, IV. iii. 24～6 に commence, act ; 2H6 III. ii. 118 に commence, act ; Tw. N. I. V. 143 に degree 等々と使つている。Ham. には Polonius が大学で学生時代に芝居をやり，Julius Caesar の役を演じたと Ham. III. ii. 104～9 にあり，又同じ I. ii. 167 には Horatio が学業を怠ける癖で Wittenberg 大学からデンマークの宮廷を訪れたのだとあり，Gent. II. iii. 1～27 には Antonio が学問をやる大学へ息子をやらずミランの宮廷にやつたとあり，Shr. では Lucentio は Rheims で勉学し (Shr. II. i. 81), 'fair Padua, nursery of arts' の 'a course of learning and ingenius studies' に入り，その父親は家で倹約して働いて居るのに息子と下男は全部金を費い果してしまうと云つて歎く (V. i. 69～71) 所があり，他の若者が大学や他所へ行くのに息子を独り家庭に置くのはよくないと云つている所も (Gent. I. iii) ある。当時の大学生には現在の日本の大学生と同様に二種類の学生があつた。紳士階級以上の子弟や金持の学生は全く世俗的で，学則を守らず自由奔放で，賭勝負，fencing, dancing, bear-baiting, 狩猟即ち sport といつた方面に熱中し，殆んど総ての時間を費してしまい，余り勉強をしなかつた学生，例えば Sir Andrew Augecheek (Tw. N. I. iii.99～101.) が学生時代にあつたような学生と，唯々勉強ばかりしていて却つてのろまな学生とであつた。勿論一般の学生もあつたのであるがこれは両者の中間的存在である。このようにのろまの学生は，They have been/at a great feast of languages, and stolen the/scrapes. (LLL. V. i. 38～40) であり，又 Small have continual plodders ever won, /Save base authority from other books. (LLL. I. i. 86～87) であつて，このような学生が教師になると衒学的な馬鹿者 Holofernes 教師となるのである。

以上述べた所から解るようにシェイクスピアの作品には大学に関係のある言及や叙述が相当多量に見受けられるが，極めて之等は軽く取扱われていて，当時の英国で

は非常に重要性を占めていた両大学が彼の作品の重要テーマになつて居たり，その言及が作品の重要要素になつて居たりするものが一つもないのは彼が大学生活を自ら体験したことがなく，唯々外部から大学を眺めたに過ぎなかつたことに依るのではないかと思われる。

（4） The Inns of Court

Sir george Buck が英国の第三の大学と云つた Inns of Court がロンドンにあつた。これには the Middle Temple, the Inner Temple, Gray Inn, Lincoln's Inn の四つの有名な Inns があり，the four Inns of Court と云われた。其外に Inns of Chancery という九つの smaller Inns があつた。これらは日本の法務研修所と学校とを兼ねたようなものであつた。紳士階級や中産階級の子弟に法律の教育を施す所であつた。財政，法律方面の知識を与え，治安判事，代議士，執事，官吏として社会に任務を果す上に必要な知識を与えた。大学が民法と寺法との知識を与えたのに対して Inns は共通法の教育を一手に引受けた。

Inns of Court の学生には先づ Oxford や Cambridge に学び，其処を出てから入学して来る学生，例えば先にあげた Master Silence, J.P. の息子の William のような学生と，大学に行かずに直ちに其処に入つて学ぶ学生との二種があつた。後者の学生の方が数が多くあつた。Walter Ralegh は初めに Oxford に行き後に Middle Temple に学んだ人である。Inns の学生生活は大体 Oxford や Cambridge の学生生活と同様であつたが，学生はロンドンという都会に居るという地理的及び人的関係の有利さを持つて居り，両大学よりも自由であり，先輩や縁故関係や隣人の保護下に托された。

Inns では学生は通常 6～9 年間在学し，卒業後は下級弁護士となり，5 年後始めて Westminster 法廷で法務に就き，法廷生活十年後にして漸く法曹界の上級会員の列に加わることになつていた。Inns に関係した有名人には Ralegh の外に George Gascoigne, Francis Beaumond, Arthur Golding, Davies, Philip Sidney, Francis Bacon, Richard Hooker, John Donne 等がある。

シェイクスピアはロンドンに多く居住した関係上 Inns とは関係が深く，又その学生の人気に投じたと考えられる。Tw. N., LLL., R_3 は Inns で公演され，Rom. の Mercutio と其友達との自由な余り行儀のよくない卒直な会話は Inns of Court の若々しい青年に達した学生の気質や姿を描いたものだと Duthie はいつている。又，2H4. III. ii. 210～224 の，*Shallow.* Ha,/ 'twas a merry night, And is/Jane Nightwork alive?/ *Falstaff.* She lives, Master Shallow. /*Shal.* She never could away with me. /*Fal.* Never, never; she could always say/she could not abide Master Shallow. /*Shal.* By the mass, I could anger to the/heart. She was then a bona-roba, Doth she/hold her own well? /*Fal.* Old, old, Master Shallow. /*Shal.* Nay, she must be old; she cannot/choose but be old; certain she's old; and had/Robin Nightwork by old Nightwork before I/came to Clement's Inn. /*Silence.* That's fifty five year ago. は55年昔の Inns の学生時代の余りよからぬ方面の生活を懐かしく偲んでいる。要するに Inns は演劇に熱心であり，学生が自らしばしば芝居を演じたし，又彼の戯曲もしばしば其処で公開演出されたし，彼には極めて身近であつた関係からたとえ彼が Inns の学生生活をしたことがなかつたと雖も，それが彼の鋭い観察を受けて作品中に生々と表現されている。又 Inns の学生達の彼が書き演ずる芝居に対する批評は彼の人気に影響する所大であつたことをも彼は感じていたらしく思われる。

（5） Academy

ルネサンスの花が咲き誇つたエリザベス朝の英国には古典の学問と同時に科学が新学問として勃興して来た。学者や指導的な人々が集つて高度な知的生活を推進するために academies を組織した。これがこの時代の顕著な特徴であつた。

Queene Elizabethes Achademy は Raleghの異母兄弟の Humphrey Gilbert が1564年頃に組織したもので，女王の監視人や貴族階級及び紳士階級の息子達に高等普通教育を与える為のものであつた。古典語，諸外国語，英語，数学，物理学，法律，市政策，技術学習，医学などが教えられ，教育を広い基礎に立脚させて公的生活に密接に関係づけることを意図してものであつた。

'*Academy*' は主として学者の集りであつて今日の学会の研究面を強調したものに相当すると考えられる。Matthew Parker, Cecil, Stow, Lambarde, John Bale などがその有名な会員であつた。

英国史及び古事研究会は英国史の考古学的及び憲法上の諸問題を研究討議する学会でその会員は凡ゆる階級の人々を網羅していた。Parker, Cecil, Nicholas Bacon, Francis Bacon, Thynne, Camden, Cotton, Ralegh, Selden, Speed, Usher, Earl of Pembroke (William

Herbert), John Davies, Arthur Golding などがその主なる会員であつた。

このような academy は当時のロドンに相当数あつたと思われる。Navare 王 Ferdinand は彼の宮廷を academy にすると，Our court shall be a little Academe, (LLL. I. i. 13)，と云い，其処では，And where that you have vow'd to study, lords, (IV. iii. 296) と誓つて研究することにし，In leaden contemplation…… (IV. iii. 321)，に生活すことにしたのであるが，この LLL. の academe は the ninth Earl of Northumberland の Philosophical Academy に対する諷刺であつたと云われている。

シェイクスピアはこのような academy を相当に熟知して居り，余り好感をよせていなかつたし，そのいづれにも会員として参加して居らなかつたらしく思われる。

（6） 教育の中心としての宮廷

エリザベス女王の宮廷は国政の中心であつたと同様に学問文芸及び教育の一つの中心でもあつた。其処では表面は教養のある作法の正しい様相を皆装つて居つたが，裏面では偽瞞，権謀術策，背信等凡ゆる手段を用いて他人を陥れ，自己の勢力と栄達とを計る処世の術を暗に教える所でもあつた。そうした事の一種の達人とも見做さるべき人達には Burghley, Walsingham, Hatton, the Sidneys, the Knollys の如き politicians が居た。中途で敗れ去つた人々には，Essex, Southampotn, Bacon, Ralegh, Philip (Earl of Arundel), the Earl of Oxford などが居り，彼等は一時は非常な権勢を握つたが結局は失敗した人々であつた。Essex 伯のように朝には宮廷の華と仰がれ，夕にはロンドン塔の獄窓に自らの運命を嘆き，やがて断頭台の露と消え去つたのである。これら宮廷人の中心には女王が居た。彼女は，ギリシヤ，ラテン，イタリア，フランスの各語を自由に使い，文学，演劇，音楽に秀で，政治外交財政と手腕を振い，宮廷人達に対して教育の最高水準を自ら示した。其故に女王の宮廷は貴族や政治家や軍人や其他文芸家美術家など殆んどあらゆる方面の為すあらんとする人々の勢力の源泉であり，運命の本源であつて，国内は勿論のこと外国からも常に凝視の的であつた。宮廷こそ社会の総ての中心であり真の檜舞台でもあつた。

シェイクスピアは或る宮廷貴族の家庭教師をしたことがあつたとか秘書をしたことがあつたとか云う説があるが，実際に彼の patron として宮廷貴族を持ち，彼等宮廷人達に知人が多く，彼等の生活や運命を熟知していたと考えられる。彼の戯曲は宮廷で女王の前でもしばしば上演されたのであるが，彼の作品は宮廷や貴族達の生活より甚大な影響を受けていることは今更例を引いて説明するまでもなく誰もが知つている所である。

（7） 教育としての旅行

ルネサンスの影響をおそく受けた当時の英国人にとつてはイタリー，スペイン，フランスは先進国と見做された。これは丁度現在の日本人が米国，英国，ソ連を眺める態度と似通つた所があつたと思われる。其故に其等の国々に旅行し視察して，其等の国情に通じた人々は学問教養のある先端的な人々と考えられた。旅行は若い人々にとつては教育の一部であり，年輩者には人生経験の一部と考えられたのは当然の事と云わねばならない。然らば旅行の目的は何かと云うと，Bacon の随筆によると，外国の宮廷，裁判所，宗教裁判所，教会，修道院，宗教的遺品，都市の城壁や堡塁，港湾施設，古代遺物や旧跡，図書館，大学，学問上の論争及び講義，船舶，海軍，大都市近接の儀礼用及び娯楽用建造物及び庭園，紋章，兵器廠，火薬庫，取引所，会計所，商品庫，馬術，剣術，軍隊訓練，上流人の見物に集る喜劇，宝石や装束の宝庫，飾棚，珍品等々と云つた記憶して置いて然るべき一切のものを見学するにあつた。其外に凱旋式，仮面劇，饗宴，結婚式，葬儀，死刑執行等々の如き記憶しおく必要なき事もやはり見学すべきであると Bacon は云つている。以上より知り得るように旅行は文明文化を摂取するを目的として居る。先進国の事情に通じ，諸外国の文化を身につけることが，国力を発展させようと人心が外向的であり，発展的であつたエリザベス朝の英国人には重要な教育であり，外国旅行家は立派な教養のある人と考えられたのは当然の事と云わねばならない。そして外国語に通ずることはこうした教養のある文化人となるための必須条件とされていた。

シェイクスピアの作品には人物其他の事状が本質的には当時の英国のものを描きながら人名や場面などをイタリーや其他の諸外国のものを用いている作品が多いのは種々なる原因があつたと思われるが，当時の人心が諸外国に向いていたのを利用したことにもその一原因があつたのであろう。Home-keeping youth have ever homely wits, (Gent. I. i. 2) は当時の英国人のこうした人心の動向を示し，*Hortensio.* And tell me now, sweet friend, what happy gale／Blows you to Padua here from old

Verona？／*Petruchio*. Such wind as scatters young men through the world／To seek their fortunes farther than at home／Where small experience grows. (Shr. I. ii. 48～52) は当時の若い英国人の気風をよく語つていると考えられる。

以上のような旅行に関する例は彼の作品の処々に見受けられるのであるが，英国は国力文化共に先進の諸国に追いつき，更に其等よりも進んで行つた。一方先進国はルネサンスの末期的症状をあらわし始めた。嘗ての欧州の指導者的役割を果したイタリーは第16世紀末には既に昔とは白と黒，徳と悪弊といつた程に堕落していた。其故に外国語よりも母国語としての英語が次第に重視されるようになり，外国ずれのした英国人，特に堕落したイタリア風に染つた英国人は the Italianate Englishman と呼ばれ，全く嫌厭嘲笑の的とされるようになつた。Roger Ascham に依るとこのような人間は，A marvellous monster, which for filthiness of living, for dullness to learning himself, for wiliness in dealing with others, for malice in hurting without cause, should carry at once in one body the belly of a swine, the head of an ass, the brain of a fox, the womb of a wolf. (The Schoolmaster)であつた。シェイクスピアもこのようなことに気付いて居り，Fashion in proud Italy,／Whose manner still our tardy apish nation／Limps after in base imitation. (R2 II. i. 21～23) とイタリーの真似をののしる言葉があり，又 Rosalind の言葉に，Farewell, Monsieur Traveller : look you／lisp and wear strange suits, disable all the benefits／of your own country, be out of love with／your nativity and almost chide God for making／you that countenance you are, or I will scarce／think you have swam in a gondola, (AYL. IV. i. 33～38) と Jagues を the Italianate Englishman の如く振舞うがいいと罵つている。

以上より考えるとシェイクスピアもやはり外国旅行は人間を教育するのであることを認めているが外国風に染つて英国人たることを忘れてしまうことを嫌つていたように思われる。彼が旅行者としてイタリーを旅行したことがあつたであろうという説があるが真偽の程は不明であり，寧ろ外国旅行の経験がなかつたと考える方が真実に近いであろう。

(8) 社会に依る教育

A. L. Rowse は In the end it was the society itself, as always that was the chief school of Education と云つて居るが，エリザベス朝の社会は全く教育の主要な場であつた。中世社会から脱皮して今代社会への変遷期であつた。ルネサンスの今代思想の花の咲いた時代であつたが未だ中世思想が多く残存していた。中世からのカトリック教があると同時に宗教改革によつて生れた新教があり又英国国教があつた。英国の国際的関係からいつても西欧の一小国から世界的一大強国へと発展する過渡期であつた。又国王や貴族の政治からロンドンを中心とした第三階級の政治へと政権が移つて行く発端の少しく現われ始めて来た時代でもあつた。其故にあらゆる社会のものが新旧非常な勢で渦を巻き混乱していた時代であつた。其為に新旧の衝突より起る種々なる流血の惨事を屢々目撃する時代であつた。シェクスピアより少しく前の時代には一般庶民で学問のある人は 2H 6 IV. ii. 92～117 にある如く魔法使であり反逆者であり悪人であると見做された。ペンとインキを首にさげて直に絞首刑に処せられた程であり，田舎の僧侶には文の読めない者が多かつたと云われている。学校教育も Thou hast／most traitorously corrupted the youth of the／realm in erecting a grammar school. (2H6I V. vii. 35～37) とあるように文法学校を建てた為に首を切られるといつた程であつた。それが前に述べたようにこの時代になると文法学校は英国史の前後を通じて人口対学校数の比率が最も大であつたと云われる迄に教育が進み，学問が盛になつたのである。人々も野蛮状態から文明状態へと（新興学問に依る）移り変る途中にあつた。彼等の社会は意気旺盛で外向的で広々とした世界であり，反面矛盾に満ちた世界であつた。感覚感情の鋭い反面にかなりの残忍なことも一向平気であり，痛々しい感情をも恐れず堪え，最悪の事態も勇敢に迎えたのである。一般人には偽善などは考えることの出来なかつた所であつた。子供の教育も厳格を極め，幼少の頃から人生の苦悩を恐れず大胆に打ち勝つ行くことが教えられた。鋭敏なる感覚と敏活な智慧とを以つて人生経験を把握して行くことが幼少の頃の学校教育から既に訓練されたのである。

しかしこうした新旧矛盾を孕んだ社会にあつても思想や教育の中心になつた論題があつた。それは order and degree と云うことであつた。E. M. W. Tillyard や G. I. Duthie の如き学者達が当時の世界観として説いて居る通りであつた。其結果社会において権威と服従とが強調された。これは教会，学校，詩人等あらゆるものによつて説かれたのであつた。The Heavens themselves, the planets and this centre／Observes degree, priority and place, ／Insisture, course, proportion, season, form,

/Office and custom, in all line of order; (Troil. I. iii. 85～88) を始めとしてシェイクスピアの作品の処々に見られる所である。彼の悲劇はこの order and degree が Machiavellism や其他の新興の思想によつて混乱される所に発生して来るとも考えられる。不思議なことにこの order and degree 観がこのエリザベス朝という社会の生活力旺盛で活動的な人々の自由を抑えて創造的活力を萎縮させることがなかつた。これが強調されたこと自体が社会に活力が充溢し過ぎていたことを示し，これが女王を中心として集結され，一朝有事の際には外敵を破り，国力を伸長させて海外発展となり，学問文芸を向上せしめたと考えられる。

このように若々しく元気に溢れた時代でありながら Essex 伯を始めとして貴族，宗教家，政治家，学者，其他の人々の目まぐるしい程の盛衰の様を現実に見せつけられたこの時代の人々は世の中の移り変りの教訓を自ら体得していた。No perfection is durable. Increase hath a time, and decay likewise, but all perfect ripeness remaineth but a moment: As is plainly seen in fruits, plums and cherries; but more sensibly in flowers, as roses and such like, and yet as truly in all greater matters. と云つた Ascham の言葉は彼等が現世社会から学びとつた最大教訓であつた。シェイクスピアにもこの思想が殆んど総ての彼の作品の根元に横つている。Life's but a walking shadow, a poor player/That struts and frets his hour upon the stage/And then is heard no more: (Mac. V. v. 24～26) という Macbeth の言葉もこうした考えを表わしているものと解される。

シェイクスピア程かような社会から教育を受けた人はないといつても過言ではなかろう。彼の作品はこの時代の面の矛盾の背後を貫く人間社会の永遠に変らぬ相をも見事に捉えて居るのであるが，作品を理解すればエリザベス朝の社会が最もよく理解出来るし，又この時代の社会を或る程度理解することなしには彼の作品を理解しようと試みても作品の半面を理解するに止まるであろう。彼の戯曲は，Whose end,/both at the first and now, was and is, to hold,/as 'twere, the mirror up to nature; to show/virtue her own feature, scorn her own image,/and the very age and body of the time/his form and pressure. (Ham. III. ii. 24～29) とあるように nature に鏡を掲げて映し出したのものであつて，彼のいう nature とはエリザベス朝の社会や人々にこそ nature の本体を具現していたのであつたからである。

(9) 結 び

シェイクスピアが劇作家と成功するまでに受けたであろう所謂徒弟時代の修養のことには一切触れずにエリザベス朝の学校教育や其他の教育を概説しながら其等が彼の作品にどのように響いているかを眺めて来たのであるが，彼の如き古今東西にわたつての最大天才を産むにはやはり其処には極めて発達した教育が母体としてあつたことを発見するのである。そして新旧両時代の両思想と社会とがこの教育を支えていたのである。其故に故なくしては天才は生れるものではないという感じにうたれる。成程彼は学校教育としては唯中等教育を与える文法学校の教育を不完全に受けたのみであつたが，凡人には教育とはならなかつた世の中の総ての物からも精神の発達の栄養となるべき教育を摂取したのであつた。特に彼が幼少時代に受けた家庭教育及び当時の人間社会全般を縮小簡略にした縮図ともいうべき Stratford-on-Avon の町や附近の野山から受けた郷土の教育と後年ロンドンという大都市生活から受けた社会による教育とが世の中と人間とを理解させ彼の天才を育成させる上に非常に貢献したように思われる。L. C. Knights は Poetry, Politics and the English Tradition の中で，Just as the basis of Shakespeare's verse, even at its most subtle and far-reaching, is the common language, so at the basis of his profoundest comments on man in society is the habit of judging public affairs in terms of their specific human causes and consequences, learnt in the school of the small local community. と云つて彼の郷里の町での生活を重視している。彼は教育を何処で受けたにせよ，彼の受けた教育はエリザベス朝という特殊な時代の人間及び社会を具体的に特殊的にとらえ，それらの深奥をのぞき，その理解した所に基いて芸術作品を巧妙に創造する力を養う教育であつた。理論整然とした体系化した抽象的普遍的な学説の如き教育ではなかつた。しかし彼の受けたそうした教育こそ永遠的生命を持つ作品を創造することを可能ならしめた一原因であつたのではなかろうか。 (1955. 8. 27)

参 考 文 献

1. A. L. Rowse : The England of Elizabeth.
2. J. D. Wilson : Life in Shakespeare's England.
3. E. K. Chambers : William Shakespeare.
4. Shakespeare's England and An Account of Life and Manners of his Age.
5. G. M. Trevelyan : Illustrated English Social History.
6. 引用 text : The Works of William Shakespeare, the Globe Edition,